

令和 7 年度 入 学 試 験 問 題

国 語 (3 科目入試)

注 意

1. 合図があるまで表紙をあけないこと。
2. 解答はHBの黒鉛筆もしくはシャープペンシルで解答用紙の問題番号に対応した解答欄にマークすること。
3. 解答用紙に受験番号を正しくマークし、氏名を記入すること。
4. 解答用紙に解答以外のことを書いた場合、その答案は無効とする。
5. 受験票は机に出しておくこと。
6. 【国語】の問題は1番から41番までとなっており、別に記述問題が1問あります。記述問題の解答は、マークシートではなく記述問題用の解答用紙に解答すること。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

生物学者の福岡伸一は、西田哲学の流れをくむ池田善昭との対話の中で「時間と空間という相反する秩序がこの世界において一つになっている」ことを、西田が「絶対矛盾的自己同一」と呼んだと解釈した。「生命とは要素が集合してできた構成物ではなく、要素の流れがもたらすところの効果」であると言¹い、その例として細胞膜を挙げている。

細胞膜は、物質の移出入が同時に起こる、内側でも外側でもない場所である。物理学第二法則（エントロピー増大の法則）によれば、すべての秩序は崩れていく運命にある。生命は、その運命に抗して、細胞膜からなる秩序を維持しなければならない。その本質は、秩序を強化して守ろうとするのではなく、絶え間なく自らを壊して再生する流れの中に置くことだと言うのである。それが西田の言う「絶対矛盾」であり、「場所の論理」すなわち「あいだ」のことだというわけだ。池田は「時間は空間に包まれながら、逆に空間を包んでいる」と言い、西田の言う「行為的直観」とは、過去から未来へ時間が流れるのではなく、未来から過去へ流れることを感じ取ることだと説明している。福岡はそれを「先回り」、すなわち「未だ来たらざるものであるが現在において既に現れているもの」を感じ取る能力と見なした。

福岡が言うように、近代科学は時間を単に空間化して（直線と点に置き換えて）、幾何学的に見てきた。しかし、生きるという働きに立脚して見るならば、その働きは行為的に見られるものでなければならない。生命における時間というのは、生きる行為の上で、未来のほうからこちらへ向かってくるものがなければならぬ。時間とは、生きる行為にとって直観的に感じ取られるものであるはずだ。これが時間即空間、空間即時間の意味である。

① 昆虫少年だった今西は、昆虫を集めて標本箱に留めている自分の行為を「死物学」と反省し、これからは生きている生物の研究として「生物学」²をやろうと決心した。

生物を分類しようとすれば、その動きを止め、体を部分に分けて比較しなければならない。② それでは、生物を部分的にしき理解したことにならない。分類学に限らず、生態学も生理学も行動学も、生物のある動きや働きを取り出して分析する。それでは生物の本質である「生命の流れ」や「自らを壊しつつ創造する」能力、「未来を先取りする」能力を知ることはいかならない。生命とは「絶えず動くもの」だ。西田の思想に出会う前に、今西はそれを自然観察から理解していたのである。

この理解を前提にすれば、構造即機能という概念もわかりやすくなる。構造は空間的なもので、機能は時間的なものだからである。それを今西は採食と繁殖を例にとって説明している。

食物は空間的に散らばっているが、繁殖は時間的に推移する。どの生物の体をとってみても、栄養に関連する器官のほうが、繁殖に関した器官よりも大き

い部分を占めているし、どの生物の一生を考えてみても、栄養のために費やす時間のほうが、繁殖のために費やす時間より多い。③、空間的な知覚が、時間的な知覚より優先されてしまうというわけだ。

しかし、それは本来分けられないものであり、生物はそれを同時に知覚する能力を持っている。その能力を、西田は「行為的直観」と呼び、今西は「主体性」と呼んだ。

「主体性」という概念には、生物と環境との関わりについての考えが色濃く反映されている。和辻も西田も今西も、人間を含む生物と環境は、切り離せないものと考えた。これは西洋的な「主体化」の論理とは明らかに異なる。西田の言葉を借りれば、「一つの主体が他を否定することで、技術や市場が生み出す画一的な『環境世界』ができていく」。科学的態度とは、対象を見ている主体があり、その主体から切り離された対象があり、主体がその対象を観察して分析することで生み出される。環境を客観視できるからこそ、近代科学は人間の都合のいいように環境を改変できたのである。

これに対して今西は、生物と環境はIにあると考えた。「生活の場」という意味は、単なる生活空間といったものを指すのではなく、それはどこまでも生物そのものの継続であり、生物的な延長をその内容としていなければならない「絶えず働かねばならぬ生物の生活とは、環境の同化であり世界の支配であり、それは結局生物に具わった主体性の発展ということにはかならない」変異ということそれ自身もまた主体の環境化であり、環境の主体化でなければならぬ。生きるということの一表現でなければならぬ」と述べている。

今西たちのような考えは西洋にもある。ドイツの生物学者で哲学者でもあるヤーコプ・フォン・ユクスキュルは、一九三四年に刊行した『生物から見た世界』という書籍の中で、それぞれの動物はその種に備わった能力を用いてそれぞれ別々の「環境世界」を認知しながら暮らしているという趣旨のことを書いている。

④、あらゆる生物は住んでいる環境と切り離せない関係にあり、それぞれの種はその環境を担い込んでいる。われわれ人間にとつての環境は、イヌやハエの環境とは違うものなのだ。⑤、それぞれの種によって認知された環境は、その種の個体の感覚を通じてアフォードし、その種に独特な「生活場所」、すなわち「環境世界」を形づくる。主体と環境との双方向の働きかけがあり、細胞膜と同じように同時に起こるので分けることができない。つまり、それは「即」、すなわち「〜として」「あいだ」の論理である。

【1】

この「あいだ」の論理は、日本の霊長類学がその草創期に据えた課題を考えるのに重要な概念である。山内得立^(注4)によれば、それは西洋の排中律ではなく、容中律の考えに立脚しているからである。

【2】

テトラレンマという、^(注5) ナーガールジュナ（龍樹）が『中論』で説いた四段論法がある。「AはAである。Aは非Aではない。AはAであり、且つ、非Aでもある。AはAでもなく、非Aでもない」という四句から成っている。前の二句が排中律、後の二句が容中律である。山内は後の二句の順番をひっくり返して、両否を両是の前に置いた。両否が最後であると、もう何もできなくなるが、両是であれば、いろいろな可能性が開けてくるからである。

【3】

山内得立は一九七四年『ロゴスとレンマ』の中で、この容中律について説明している。二つの対立する考え方の間で身動きが取れなくなることをジレンマという。これは「ジ・レンマ」、レンマが二つだ。テトラレンマには四つのレンマがある。ジレンマは「AはAである、Aは非Aではない」、つまり二元論で二者択一しかない。龍樹、そして山内得立は、もう二つレンマがあると考ええる。「Aと非Aのどちらでもない、どちらでもある」が容中律で、ぐっと思考の幅を広げる。日本人は「鳥獣戯画」のようなカエルやウサギやサル絵を見て直感的に人間のドラマとして II が入り込めるからだ。どちらかしかないではなく、どちらもある状態、つまりサルでもあり人間でもある、またカエルでもありながら人間でもあるということだ。

【4】

日本の霊長類学がその草創期から重要なテーマに据えた「動物社会の進化」は、この「あいだ」の論理を前提にしている。

【5】

西洋の思想は社会も文化も人間にのみ与えられたものと見なしていた。新約聖書の「ヨハネによる福音書」の冒頭に「はじめに言葉ありき」と記されているように、万物は言葉によって成り、それを治めるのは言葉をしゃべる人間だけである、という考え方が支配的だったのだ。

言葉によって意識が生まれ、意識によって社会も文化もつくられる。だから、西洋的な言葉を持たない動物たちは社会も文化も持たないという考え方と、自然との断絶はとてつもなく深い。昔話や寓話ⁱⁱにおいても、西洋では人間が魔法によって動物の姿に変えられることはあっても、動物が人間になることはほとんどない。そのため、⁴ 一九世紀にダーウインの進化論が登場した後も、動物と人間の進化的連続性を認めるのに長い時間がかかった。一七世紀のデカルト以降、自然は物理化学の法則にしたがう機械的なもので、刺激に対して一様に反応するシステムとして動いていると考えられていたのである。

一九世紀に盛んになった社会学も、人間の営み、特に道徳や社会制度について扱う学問であった。進化論を人間の社会に応用して家族の進化を論じたルイス・ヘンリー・モルガンのような文化人類学者に対しては、^(注6) フランツ・ボアズをはじめとする III たちから「社会の要素を取り出して相互に比較

し、どちらが原始的というような評価を下すべきではない」という反論が巻き起こった。その結果、進化論は人間の社会を対象にしないという暗黙の了解が西洋の思想界にはでき上がった。

(注1) 西田——哲学者である西田幾多郎。

(注2) 池田義昭——哲学者。

(注3) 今西——生態・人類学者である今西錦司。

(注4) 山内得立——哲学者。

(注5) ナーガールジュナ(龍樹)——南インドのバラモン出身の僧。

(注6) フランツ・ボアズ——アメリカ合衆国の人類学者。

* 問題作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

問1 傍線部1「その例として細胞膜を挙げている」とあるが、細胞膜を例として挙げることで、どのようなことを説明しているのか。その説明として最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は 1。

a 時間は空間であり、空間は時間であるというように、時間と空間の間に差異を見出すこと^いなく同一化することによって、時間を先回りして捉えることが可能になるということ。

b 時間は過去から未来へと不可逆に流れるものではなく、未来から過去へと可逆的に流れるものであると捉えることによって、時間を秩序づけることができるようになるということ。

c 時間を幾何学的に見るのではなく、生きるという働きに即して捉えることによって、時間は空間という絶対的に矛盾するものを超越し制御することができるようになるということ。

d 時間は空間に包まれながら、空間を包み込んでいるものでもあるので、物理学第二法則であるエントロピー増大の法則に基づいて捉えることができるというものであるということ。

e 時間と空間は本来分けることができないものであるので、時間は近代科学のように空間化して捉えるのではなく、生きる行為によって直観的に捉えるべきものであるということ。

問2 空欄①～⑤を補うのに最も適当なものを、次のa～eのうちから一つずつ選びなさい。ただし、同じものを二度以上選んではならない。解答番号は

①－②、②－③、③－④、④－⑤、⑤－⑥。

a そして b つまり c しかし d そのため e かつて

問3 傍線部2「『生物学』をやろうと決心した」とあるが、今西は生物をどのような存在であると捉えているのか。その説明として最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は7。

a 生物は空間的に散らばっている食べ物を食べることで繁殖を行い、子孫を存続させるために、環境に適応するのではなく、環境を制御し支配している存在であると捉えている。

b 生物は体を要素に還元して捉えることができる存在ではなく、また環境とも双方向に働きかけを行うことによって、密接な関係を持っている存在であると捉えている。

c 生物は科学技術を用いて環境を自分の都合の良いように改変してきた人間とは異なり、環境を対象化することで自らを変異させ、種を存続させてきた存在であると捉えている。

d 生物は空間的な構造と時間的な機能を区別することによって、自らを壊しつつ創造するという能力を有効に活用しながら、効率よく生きている存在であると捉えている。

e 生物は生活の場を単なる生活空間と認識することなく、どこまでも生物そのものの継続であり、生物的な延長として客観的、分析的に認識している存在であると捉えている。

問4 空欄Iを補うのに最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は8。

a 大同小異な関係 b 一期一会な関係 c 不離不即な関係 d 呉越同舟な関係 e 当意即妙な関係

問5 傍線部3「ヤーコプ・フォン・ユクスキュル」とあるが、彼は生物をどのように捉えているのか。その説明として最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は **9**。

a ある種にとっては食べ物である植物が、別の種にとっては住み処^かになるというように、生物は、周囲の環境に左右されることなく、自らの対応の仕方为主体的に決定しながら生きていると捉えている。

b 生物は人間のように言葉を持っていないため、文化的、社会的に進化することはできないが、それぞれが別々の環世界をもっており、人間とは異なった進化を遂げるようになったと捉えている。

c 主体と対象を切り離して考える西洋科学的な二元論的あるいは二者択一的な態度をとることなく、容中律の考えに基づき、生物はそれぞれが独特な生活場所で生きることになったと捉えている。

d 生物は、それぞれの種が主体となつて、自らの個体の感覚を通して環境に働きかけることによって、人間にとっての環境とは異なつた、それぞれに自らの固有の環境を生きていると捉えている。

e たとえ種が異なつたとしても、自然環境からの刺激に対しては同じ反応をするように本能づけられているため、主体の環境化を行うだけではなく、環境の主体化を行うことになると捉えている。

問6 二重傍線部i、iiのここでの意味として最も適当なものを、後のa～eのうちから一つずつ選びなさい。解答番号は i **10**、ii **11**。

i ロゴス

a 科学を用いた分析的な活動

b 論理を用いた絶対的な活動

c 言葉を用いた理性的な活動

d 経験を用いた実存的な活動

e 技術を用いた効率的な活動

ii 寓話

a 世俗化した文学に託して人間的な内容を語る物語

b 画期的な出来事に託して独創的な内容を語る物語

c 絶対化した人物に託して神話的な内容を語る物語

d 象徴化した事物に託して風刺的な内容を語る物語

e 擬人化した動物に託して教訓的な内容を語る物語

問7 空欄Ⅱを補うのに最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は **12**。

- a 見立てること b 託^{かたづ}けること c まとめること
- d 弁^{わきま}えること e あげつらうこと

問8 次の段落は、本文中の【1】～【5】のどこに入るか。後のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は **13**。

これを生物と環境との関係でいえば、同じ植物であっても、イモムシにとっては食べ物であるが、アリにとっては住み処であるというようなことが起こる。こうした例は、生物界にはいくらかでもあり、今西はこの論理に基づいて生物の進化を考えたのである。

- a 【1】 b 【2】 c 【3】 d 【4】 e 【5】

問9 傍線部4「一九世紀にダーウィンの進化論が登場した後も、動物と人間の進化的連続性を認めるのに長い時間がかかった」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は **14**。

a 新約聖書にも書かれてあるように、西洋の思想では社会も文化も人間のみに与えられており、社会や文化を作ることができない動物が進化するなどということとは信じられなかったから。

b 進化論は人間の社会を対象にしないという暗黙の了解が西洋には厳然と存在していたにもかかわらず、その了解を破ったダーウィンの進化論は信じるに値しないと考えられていたから。

c 「万物を成り立たせている言葉」を持たない動物と、その言葉をしゃべって万物を治め、社会や文化を作ることができる人間とが進化的連続性を持つことなどないと考えられていたから。

d 動物は本能にしたがうことで、画一的に動く機械的なものであるのに対して、人間は物理化学の法則にしたがい、多様な振舞いをするという違いがあると西洋では考えていたから。

e 西洋の昔話では、人間が魔法によって動物に変えられることはあっても、動物が人間になることはないことから分かるように、人間と動物は非対称性を持つと考えられていたから。

問10 空欄Ⅲを補うのに最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は15。

- a 専制主義者 b 功利主義者 c 原理主義者 d 実存主義者 e 文化相対主義者

問11 本文の内容と一致するものを、次のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は16。

- a 今西は生物が空間と時間を同時に知覚する能力を「主体性」と概念化した。ここには生物と環境との関わりについての考えが反映されており、キリスト教の影響の強い西洋社会にはない生物のとらえ方である。
- b ナーガールジュナが『中論』で説いた四段論法を、山内は日本的に解釈し直し、二元論で二者択一的であったナーガールジュナの考え方を、「Aと非Aのどちらでもない、どちらでもある」という容中律に改めた。
- c 日本人は西洋の科学的な思考方法が身についておらず、人間を人間として捉えるだけではなく、サルともカエルとも捉えることができたため、人間中心主義に陥ることもなく、思考の幅を広げることが可能だった。
- d 物理学的には全ての秩序は崩れていく運命にあるが、生命は絶え間なく自らを壊して再生する流れを作り、その運命にあらがおうとするように、生命とは絶えず動くものであると、今西は思弁的に認識していた。
- e 未来から過去へ時間が流れることを感じ取ること、先回りする能力であると福岡が解釈していた「行為的直観」は、生物と環境を切り離すことができないと考えた今西の「主体性」につながる考え方である。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

(注1) シンギュラリティの議論やその周辺イメージを貫いている観点を一言で表すとすれば、「情報処理」¹ということになるだろう。

情報処理とは、「情報に対して何らかの処理を施すこと」である。現代ではあまりに一般化した言葉だが、ここでは「処理」という言葉によって、情報を処理する機械、端的に言えば、コンピュータが示唆される点に注目しよう。

言うまでもなく、仮想空間はコンピュータによる情報処理によってつくりだされる。作品世界の脳神経系に接続されるのも情報処理機械としてのコンピュータであるし、機械化された身体の制御もコンピュータによる情報処理として行われる。脳や身体がそうしたコンピュータによって制御できるということは、脳や身体そのものも、情報処理を行うコンピュータのごとく捉えられているということである。

X

つまり、情報処理という観点には、機械的に処理できるものとしての情報観が内在している。コンピュータの介在はわかりやすい特徴であって、必須のものではない。情報の「意味」という難問を不問に付したまま、「情報は機械的に処理できる」とする信念こそがその本質である。

「情報は機械的に処理できる」という前提があるからこそ、脳神経系が扱う情報は電子回路でも扱えるし、身体的情報も機械につなげて処理できるものとなる。脳にプログラムをインストールできるという発想は、さらに一歩進んで、脳も情報処理を行う一種の機械として捉えているわけである。脳へのインストールやそれへの直接アクセスというイメージに表れているように、情報処理という観点は、入出力をもつ機械として対象を捉えることも結びついている。こうした「情報処理」という観点を中心としたものの見方は、「情報処理パラダイム」や「コンピューティング・パラダイム」と呼ばれている。これらは多様な分野で、しかもさまざまな文脈で用いられている言葉であり、その内実を **I** に示すのは難しい。だが人間の知能をコンピュータによる情報処理として再現しようとするAI研究は、明らかにこれを象徴する営みである。ほかに、たとえば心理学の分野では、人間の心理をコンピュータのような一種の情報処理機械として見る思考体系を「情報処理パラダイム」と呼んでいる。同様に、企業のような組織の経営を情報処理という観点で捉えるパラダイムは、経営組織論において「情報処理パラダイム」として術語化している。

映画『マトリックス』で示される世界観は、このパラダイムの究極形である。コンピュータによる情報処理によってつくりだされている仮想世界が、フェイクとして気づかれることなく、現実として受容されている。さらに映画の中のその仮想世界が、映画を観る我々自身の現実と変わらぬものとして描かれることで、我々自身のこの世界をも仮想世界として疑うように自然と導かれる。まるで、宇宙で生じるあらゆることは情報処理である、と宣言しているかのようである。

「あらゆること」とまで言わずとも、情報処理という観点では、人間の世界も機械の世界も同じに見えてくるという点が重要である。あなたがいま行っている「読書」を一種の情報処理として捉えるなら、人間は一種の情報処理機械、すなわちコンピュータのように見えてくる。ならばコンピュータも読書が可能だろう。いや、それはすでにプログラムのインストールやデータ入力というかたちの「読書」を行っているのだろうか。それなら我々も、面倒な読書などせずとも、脳に直接それをインプットできるのではないか……。

シンギュラリティに期待する者も、脅威として警告する者も、このようなパラダイムの中にいるという点では同じである。「人間を超えるAI」や「完全なるAI」を想定して恐れるということは、人間とAIを、全体として比較可能なものとして並置しているということである。全体として、というのは、チェスや囲碁の強さといった部分的な能力としてではなく、トータルとしての人間、あるいはその本質において——それが何であろうとも——という意味である。つまり、人間とコンピュータを真に同等に捉えているということである。

天才物理学者と言われたホーキングでさえ、この点は同じである。むしろ彼は、人間の脳をはつきりとコンピュータと同一視していた。見た目も素材もまったく異なるものを同じであると主張できるのはなぜかと言えば、情報処理という観点が中心に据えられているからである。

ホーキングほど過激でないとしても、「情報」という言葉で真つ先に連想するものが「コンピュータ」であるならば、あなたも情報処理的な情報観の持ち主かもしれない。「ある種の」情報はコンピュータで扱える」という漠然とした認識と、「情報はすべて、コンピュータで扱える」という言明の間には、本来、大きな溝があるが、II にコンピュータと違って曖昧な人間の思考は、簡単にこれを飛び越えてしまう。

我々が漠然とAIを恐れるのも、結局のところ、知らず知らずに後者のごとく捉えているからにはかならない。つまり、「情報はすべてコンピュータで扱える」と考えているからこそ、言い換えれば、コンピュータ・パラダイムにどっぷりと浸かっているからこそ、人間と同等か、それ以上に優れたAIの出現を恐れるのである。

したがって、ここで少し立ち止まって考えてみることもできる。もしもこのパラダイムに限界があるなら、言い換えれば、情報処理的な「情報」が情報の本質でないなら、人間とAIはまったく別物であるという可能性が出てくる。そうであるなら、AIをむやみに恐れる必要はない。AIは人間を補助する数ある機械の一つに過ぎず、いかにうまく使うかという問題だけが残るのかもしれない。

だが現時点ではこれは願望の一種に過ぎないから、とりあえず脇に置いておこう。

ところで、人間と機械が本質的に同じだとして、我々はそれを恐れるべきだろうか。ましてや、同じであるはずの機械と戦う必要はあるのだろうか。

『マトリックス』の主人公であるネオたちは機械との戦いに挑むが、脳にプログラムをインストールするあのシーンが象徴するように、情報処理機械という点で、実は自分たちも端から機械であるとも言える。ならばそこには機械が機械に挑むという、ただの勢力争いの構図しか存在しないことになる。機械同

士の戦争があるだけである。

とはいえ、我々が恐れるのも無理はない。²人間と機械の同一視には、もつと深刻な問題が潜んでいる。『マトリックス』を機械同士の戦争物語として片付けることができないほどに、これまでの人間のあり方と、その社会を脅かす問題である。

人間と機械の同一視という事態を、別の角度から眺めてみよう。

機械という概念は比較的新しい概念だが、それでも近年に至るまで、普通は人間とは異なるものとして理解されてきた。それがいま同一視されつつあるということは、機械が人間に近づいているか、人間が機械に近づいているか、少なくともそのどちらかであるということになる。

実際のところ、この二つのプロセスはともに現に進行中であると言えよう。それも Ⅲ としてではなく、リアルな事態として生じつつあると認識されている。

人間に近づきつつある機械とは、もちろんAIのことである。AIとは、一言で言えば「精神化された機械」である。「AI」という言葉は、一九五六年に開催されたいわゆるダートマス会議^(注2)に端を発するが、それはまさにコンピュータという機械によって精神を Ⅳ 試みとして提起されたものである。

「ChatGPT」や「ワトソン」といったAIは、近年におけるその到達点にはかならない。こうしたAIの開発は、機械を人間の側に引き寄せようとする試みであり、その結果として、機械が人間社会に深く入り込んでくるという事態が生じつつある。

こうした「機械の精神化」の裏側で生じているのが、「精神の機械化」³である。これは逆に、人間を機械の側に近づけようとする試みである。

精神の機械化は、現代の科学全般に行われていると言つてよい。だがその端的な例を一つ挙げるとすれば、「認知科学」ということになるだろう。認知科学は、ダートマス会議をその起源とする見方があるほどAI研究とは密接な関わりをもつ。人間の認知活動を主としてコンピュータをモデルとする情報処理プロセスとして探究するという点で、ちょうど逆方向のものと考えることができる。AI研究に比べれば目立たないが、我々の人間観に直接関わる学問である。

実は、我々への影響力という点でより深刻に捉えなければならぬのは、機械の精神化よりも精神の機械化である。もちろん両者は互いに強く結びついていて、たとえば高度なAIが一般化することで、我々自身の自己認識も少なからず影響を受ける。だがAIに代表される機械の精神化は、少なくとも表面的には、それまで我々とは別のものであった機械という存在を我々の側に引き入れるというだけであり、我々自身の自己認識に直接関わるものではない。

それに対して精神の機械化は、我々自身が機械の一種であると認めることであり、我々の自己認識そのものの問題である。そうした我々がかたちづくっている社会に対しても、甚大な影響力をもつ。

ちよつと想像してみよう。もし我々が機械であるなら、これまで「人間ならではの」とのものと信じられてきたさまざまな概念、たとえば、自律性や主体性、

倫理や人権、自由、責任、法的秩序といった概念や、それらに基づく諸々の社会的制度は、崩れ去っていく可能性がある。我々がただの機械であり、人間の尊厳や根本的自由といったものと無関係であるならば、他者を道具として用いてもよいし、使い捨ててもよいだろう。機械なのだから、ダメになったら新しいものに取り替えばよいのである。長い歴史を経てようやく確立されてきた奴隷制の否定のような人類共通の価値観も、その土台を失うことになるかもしれない。

(西田洋平『人間非機械論 サイバネティクスが開く未来』による)

(注1) シンギュラリティ——人工知能が進化する過程で人間の知性を超えるのではないかとされる転換点のこと。

(注2) ダートマス会議——人工知能という学術研究分野を確立した会議の通称。

* 問題作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

問1 傍線部1「情報処理」とあるが、それはどのような観点を含み持った言葉であるのか。その説明として最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は17。

a 遺伝子操作が遺伝情報を切ったり貼ったりすることによって、人間を操作するのと同じように、情報を機械的に処理して、対象を操作しようとするという観点。

b 人間の知能をコンピュータによって再現しようとしているAI研究からも分かるように、コンピュータを必ず用いて、情報を機械的に処理しようという観点。

c 機械的に情報を処理するコンピュータを駆使することによって、人びとを欺くために、実際には存在していない仮想空間を作りだそうとするという観点。

d 入出力をもつ機械として脳や身体そのものを捉えることの前提にもなっている、情報が持つ意味などを考慮に入れることなく、機械的に処理を行うという観点。

e 現実の世界とコンピュータによって作られた仮想世界とが何ら変わらないものであることが証明しているように、情報をすべて機械的に処理できるという観点。

問2

は 18。

X

に入る、次のア～オの五つの文を正しく並べたものとして、最も適当なものを、後の a～e のうちから一つ選びなさい。解答番号

ア 遺伝情報の意味とは無関係に、塩基配列はただ機械的に切ったり貼ったりされる。

イ コンピュータでは機械的に電子情報が処理されるが、遺伝子操作では機械的に遺伝情報が処理される。

ウ 現代の生命科学にとって、コンピュータはデータ解析のみならず、実験装置の制御にも必須のツールだが、遺伝情報を担うとされる DNA (デオキシリボ核酸) という分子そのものの操作には、必ずしもコンピュータは不可欠ではない。

エ だが DNA 中の A、T、G、C という 4 つの塩基の機械的な処理として見れば、実は遺伝子操作もコンピュータによる情報処理と大差がない。

オ 遺伝子操作はどうだろうか。

a ア↓イ↓エ↓オ↓ウ

b ア↓オ↓ウ↓エ↓イ

c オ↓ア↓イ↓エ↓ウ

d オ↓ウ↓ア↓イ↓エ

e オ↓ウ↓エ↓ア↓イ

問3

空欄 I を補うのに最も適当なものを、次の a～e のうちから一つ選びなさい。解答番号は 19。

a 蓋然的

b 相対的

c 一義的

d 顕在的

e 形而上的

問4 二重傍線部 i、ii のここでの意味として最も適当なものを、後の a～e のうちから一つずつ選びなさい。解答番号は i 20、ii 21。

i 象徴する

a 相対的に評価すべきものを絶対化して表現する

c 特殊な事例でしかないものを一般化して表現する

e 潜在的に存在している事物を顕在的に表現する

ii 脇に置いておこう

a 主体的に取り組まずに、ただ傍観するだけにしておこう

b 否定も肯定もしないだけでなく、関心も示さずにおこう

c 触れることは危険なので、存在していないことにしよう

d 物事をそのままの状態にしたまま、保留しておこう

e 結論が出そうにないので、論ずることはやめておこう

問5 空欄Ⅱを補うのに最も適当なものを、次の a～e のうちから一つ選びなさい。解答番号は 22。

a 不埒な^{ちやう}こと

b 不条理なこと

c 陳腐なこと

d 皮肉なこと

e お門違いなこと

問6 傍線部2「人間と機械の同一視」とあるが、なぜ人間と機械とを同一視することができるのか。その説明として最も適当なものを、次の a～e のうちから一つ選びなさい。解答番号は 23。

a AIは人間を補助する機械の一つであるにすぎないという考え方が科学的に立証されておらず、逆に人間がAIに近づいているから。

b コンピューティング・パラダイムや情報処理パラダイムは理論的に限界があるのに、人間の曖昧な思考ではそのことに気づけないから。

c AIと人間は全体として比較可能なものとして並置できることを理解できるところまで、シンギュラリティの議論が熟してきたから。

d 人間は「情報はコンピュータで扱える」という認識と「情報はすべてコンピュータで扱える」という言明が同じだと直感できるから。

e 人間と機械は見た目や素材など部分的に見ると異なるかもしれないが、情報处理的な情報観に基づいて、両者を捉えようとするから。

問7 空欄Ⅲを補うのに最も適当なものを、次の a～e のうちから一つ選びなさい。解答番号は 24。

a 象牙の塔

b 机上の空論

c 砂上の楼閣

d 伝家の宝刀

e 自明の理^{ことわり}

問8 空欄Ⅳを補うのに最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は **25**。

- a コントロールする b シミュレートする c イノベーションする d ドキュメントする e パラフレーズする

問9 傍線部3「精神の機械化」について、次の(1)、(2)に答えよ。

(1) 傍線部3「精神の機械化」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は **26**。

- a コンピュータを人間の側に引き寄せようとする試みではなく、人間をコンピュータの側に近づけようとする試みであり、最終的に人間と機械の同一視を目的とすること。
b 人間がコンピュータをモデルに自らの認知活動を解析することによって、情報をすべてコンピュータで扱うようにして、シンギュラリティをできるだけ回避しようとするということ。
c 人間が根本的自由の下で、自律的に主体的に意味を考えながら認知活動を行っているのではなく、AIが行っているのと同じように情報を機械的に処理しているだけであるということ。
d 法的秩序に触れることなく、他者を自分の思うままに支配しようとするために、人間を機械と同じように考えるように、考え方、価値観を大きく転換しようとするということ。
e 現在は人間と機械のどちらが主導権を握っているのかが分かりにくくなっているので、人間が主導権を握るために、人間が機械の一種であることを認めるようにすること。

(2) 傍線部3「精神の機械化」は、我々にどのような影響を与えると筆者は考えているのか。本文中の語句を用いて、一〇〇字（句読点なども字数に含む）以内で説明せよ。

※解答は記述問題用の解答用紙に記入しなさい（マークシートには記入しないこと）。

問10

次の①～⑤のうち、筆者の考え方にあてはまるものにはa、あてはまらないものにはbをマークしなさい。解答番号は ①―27、②―28、

③―29、④―30、⑤―31。

① コンピュータが実用化され、「情報」という概念が重要視されるとともに「情報処理」という観点を中心としたものの見方が、意識的に社会の中に取り込まれていった。

② 精神の機械化をより進めていくために、「AI」という言葉がダートマス会議で使用され始めたが、それが「ChatGPT」や「ワトソン」というAI開発につながっている。

③ シンギュラリティに期待する者も警告する者も、どちらも「コンピューティング・パラダイム」の中にいることには変わりがないが、このパラダイムは再検討の余地がある。

④ 人間を機械であるかのように考えるようになったため、人間はアイデンティティを失ってしまったので、機械を人間の側に引き寄せるAI開発に力を注がなくてはならない。

⑤ AI研究と深い関係がある認知科学は、コンピュータをモデルとする情報処理プロセスとして人間の認知活動を探求するもので、我々の人間観に直接的な関わりをもっている。

問1 次の漢字の画数として正しいものを、後のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は 32。

- a 十五画 b 十六画 c 十七画 d 十八画 e 十九画

問2 熟語の表記が三つとも正しいものを、次のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は 33。

- a 即効―指断―心痛
b 策謀―敬体―折衝
c 冗句―衷心―偏在
d 会席―恵沢―横酬
e 墨守―一幅―億測

問3 次の文の、カタカナ部分の傍線部と同じ漢字を書くものを、後のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は 34。

反対勢力をカイジユウする。

- a ホンカイを遂げる。
b カイキヨを成し遂げる。
c ケイカイ体制に入る。
d キカイな行動をとる。
e アユ漁をカイキンする。

問4 次の四字熟語の空欄に使われている漢字の組み合わせとして正しいものを、後のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は 35。

極悪□道 — 博□強記 — 高論□説 — 天下無□ — 明窓□机

a 非 — 覧 — 遊 — 相 — 淨

b 悲 — 覧 — 遊 — 相 — 情

c 悲 — 乱 — 卓 — 相 — 淨

d 非 — 覧 — 卓 — 双 — 淨

e 悲 — 乱 — 卓 — 双 — 情

問5 傍線部の慣用句、故事成語の使い方が正しくないものを、次のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は 36。

a 故郷に帰って、竹馬の友と久しぶりに再会した。

b 会社の大事な情報を流すとは、獅子身中の虫だな。

c 図に乗って、言いたいことも言わずに黙っていた。

d 今年に入部してきた新入生は、筋がいい。

e 子供たちは目の色を変えながら実験を見ていた。

問6 慣用句、故事成語とその意味の組み合わせとして正しくないものを、次のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は 37。

a 芋の煮えたも御存じない — 一つのこと集中し、周囲が見えないこと。

b 隔靴搔痒 — 思うようにならなくて、もどかしいこと。

c 糊口をしのぐ — やつとので生活していくこと。

d 水泡に帰する — すべてが無駄に終わること。

e あばたも顰 — ほれてしまえば、相手の欠点も長所のように見えてくること。

問7 次の五つの熟語の対義語を1～10のうちから選ぶとき、正しいものがすべて含まれている組み合わせを、後のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は **38**。

「進取」「逮捕」「決裂」「多忙」「店子」

1 顧客 2 退嬰 3 解散 4 妥結 5 後学 6 釈放 7 収束 8 大家 9 余裕 10 閑散

a 1、4、5、6、8

b 2、3、5、6、10

c 2、3、7、8、9

d 2、4、6、8、10

e 1、3、4、6、9

問8 次のカタカナ語の意味を、後のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は **39**。

「オーソドックス」

a 正統的 b 歴史的 c 寓話的 d 因習的 e 規範的

問9 泉鏡花の作品を、次のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は **40**。

a 風流仙 b 高野聖 c 浮雲 d 十三夜 e 武蔵野

問10 フランスからの帰国後、森鷗外の推薦で慶應義塾大学の教授に就任し、『すみだ川』や『はくとうきたん 濠東綺譚』などを発表した作家とは誰か。次のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は **41**。

a 内田百閑 b 有島武郎 c 佐藤春夫 d 永井荷風 e 谷崎潤一郎